『第二章』について　六

昭和五十六年十月十七日
盛岡市・盛岡中央公民館

一、大地に耳をつけて、本願のいわれを
　　よく聞くだけのことである、
　　それがただ念仏である。

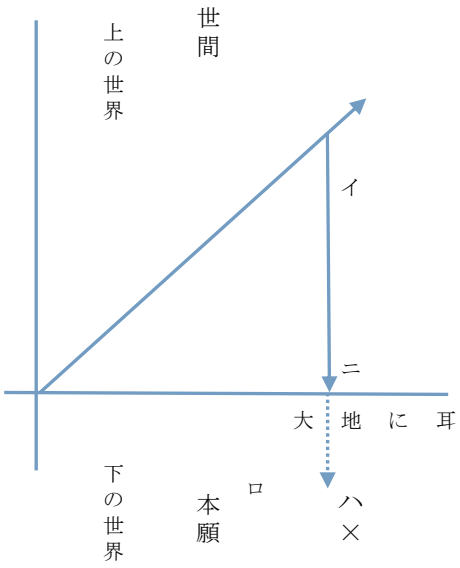
今日は曽我量深先生の『歎異抄聴記』の第九講、「一、表現の単純性」と見出しのあるところを読ませて頂きましょう。

親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、

この「ただ念仏」、これがくせ者なのです。蓮如上人にもこういう言葉があります。蓮如上人の場合は、「ただ念仏しては駄目なり」、だめだとおっしゃっている。そこには時代の違いがある。蓮如上人の「ただ念仏しては駄目だ」という、このただは本願のいわれを明らかにしないことである。明らかにするということはよく聞くことであり、本願のいわれを明らかにしないということは本願のいわれを聞かないことである。

つまり世間の学問ではただうわべだけ聞いては駄目なので、その理論と内容をよく聞きなさいと、これは普通よく言われることですね。それはそれでいいのだが、ここでは、世間の学問でなしに、世間から離れた世界での話なのです。上の世界での話ではなくて、下の世界での話なのである。

表A



この世間では世間でのいわれがあるはずなのだ、確かに。これは聞くなり、本を読むなり、考えるなり、いろいろな方法がある、この上の世界のいわれ（表Ａのイ）は。その内容についてよく吟味する、そして自分が得心いくまで理論的に分析してて考える。それはそれでいい。

だが下の世界のいわれはそういう外の意味の分析ではない。下の世界のいわれを聞くのであるここからこう入っていかなければならない（線ハ）。しかしわれわれはこの下の世界（ロ）に入るわけにはいかない。

われわれはこの上の世界にいる。できることはここ（点ニ）で聞くだけなのである。これが聴聞である。大地に耳を押しつけてここを聞くだけである。

いわれを聞かないということはどういうことかというと、上の世界のものを持ってきて、この下の世界を解釈しようとすることである。上の世界は何であるかというと、定散自力の世界である。定善、散善でしたね。定善は精神修養をやる、散善はいろいろな行いをする、善行をする、徳を積む。それは皆この上の世界のことだ。上の世界のものを持ってきて下の世界を解釈しようとしたってそれはできないのだ。いくら下の世界のものを 聞いたといっても、それを定散自力に翻訳してしまったら、上の世界の内容には確かになり得る。それは博学であるとか、よく仏教が分かっているとか、あるいは学者であるとかということにはなる。しかし、上の世界の内容であれば下の世界のものにはならない。下の世界のものはここ（点ニ）に耳を押し付けてただ聞くだけだ、聴聞するのだ。それがいわれである。聞くのであるから、それを「ただ」という。「ただ」と言っている。

「親鸞におきては、ただ念仏して」、一筋に聞くということが、これがただ念仏である。この世間のいろいろな道具を使って本願のいわれを理解しようということではない。いわれを聞くということは、下の世界の消息を聞くことである。下の世界はこれは歴史的な世界である、あるいは歴史が生まれるもとの世界なのである。これが上の世界に出てくれば歴史になる。

蓮如上人が、ただ念仏するだけではだめだとおっしゃった。それはよく本願のいわれを明らかにしないで、定善散善の自力の世界でそれを合点してしまおうとすることを戒めることでした。定善散善はこの地下の深いものを、地上に持ち出してそこで値段づけをしてしまおうというわけなのでしょうね。この世の財産をいくらたくさん持っても、念仏そのものにはならない。

とかく今の既成宗教は、大きな本山をつくったり伽藍をつくったりするが、それはなんらかの方便にはなるのでそれも無駄ではないのだろうけれども、それをもってそれが念仏だと思ったら間違いなのだ。それは定善散善の世界である。定善散善を捨てたら、この上の世界のものを一切捨てたら、残るものはただこの大地に耳をつけてよく聞くだけのことである、それがただ念仏である。だからいつも繰り返されることだけれども、法然上人のように、老少善悪をえらばれず、ただの一凡夫の法然にかえって、念仏を称えるだけである。親鸞聖人も一切の学問も階級も捨てて、ただ一人の土民として念仏するのだと、法然上人に聞いたわけである。いわれを明らかにしない定散自力の心で、いくら念仏を称えても意味はないのだと、それがただ念仏でしょうね。

それはまた善悪にとらわれないことでもある。自分の知識がどうであるとか、自分の根性がどうであるとか、自分の力ではとてもそういうことはできないのだとかいうのは、自分勝手の自分の機のはからいである。その機のはからいを捨てるということがただ念仏である。

自分の履いている草履を捨てたり、自分のかぶっている帽子を捨てるという、自分の物を捨てるくらいなら楽なことはないはずなのだけど、自分のはからいだけはなかなか捨てられないものだな、これは本当に。機のはからいをただ捨てればいいのだということは口が酸っぱくなるほど言われている。また頭ではわかっているつもりだけれども、ところがそれが捨てられないのだな。

機のはからいを捨てる、その後に残るものは何かというとただ念仏しかない。ただ念仏が出る。

ただ念仏しようと思うことも捨ててしまえばいい、それがただ念仏なのでしょう。

そのことは本願のいわれをよく聞くことだという。いわれを聞くというのは一生涯聞かなければならないもののようですね、生涯聞く。もう十年聞いたから俺はもういいのだ、そんなことはない、それは本願のいわれではない。十年聞いて無くなるようなのは本願のいわれではない。本願のいわれというのは、こんこんとして大地の底、下の世界から湧いてくる。つまり自分が生きているということは、下の世界に生かされているのですから、そのいのちのいわれを聞くそれが生きている証拠なのである。われわれが生きているということは、下の世界の力で生きていることなのですから、十年聞いたらもういいなんていうようでは、下の世界との縁を切ってしまう

ことになる。縁を切ってしまえば、これは生きていることにならない。ただ形だけが生きている。

生きているということは、われわれが生きている限り下の世界のいのちのいわれを聞くということである。

大地のいのちの泉は無限なのである。無限のいのちの泉がこんこんとして湧いてきている。そのいのちにたまたま縁があって僕なら僕がこの世に姿をとった。その僕へ大地の泉のエネルギーが通ってくれる、それで生かされている。縁が切れれば、縁が無くなれば、この上のものが息絶えてしまう、形が物だけになる。

だから曽我先生が「いや私は疲れない」と言われたのは、なんだか意地を張っておられるようにも思われるが、そうではない。考えてみると自分の中にこういう無限のいのちのエネルギーが流れているのだから、僕が生きているのではないのである。エネルギーそのものが流れているのだから、疲れるも疲れないもないのである。

だから、生きている限りいのちのいわれを聞いている。いやいのちのいわれを聞く限りわれわれは生きているのである。生きている限りいわれを聞いていく、それがただ念仏である。

いわれを聞くということは、はからいを捨てるということ、つまり定善散善の自力を捨てるということ、だから仏教の理論を理解するとか、ただお経を読むとかということではないのでしょうね。

一方では、「老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし」と言われる。ただ信心一つでいいのだと言われる。知恵も、才覚も何も要らないのだ、学問もなにも要らないのだと。それはそうに違いないのだが、そういう一面と、それから一方では、いわれを聞けといわれる。

だからこれは矛盾しているようだな。いわれというのは具体的内容である。信心というのは全く内容のないものである、いわば空（くう）そのもののようなものである。空なものと具体的な内容のものと、両面こう言われる。ただ信ずればいいのだ、他の学問など要らないのだと。かと思うとそうではない、いわれを聞け、いわれを聞けと。

いわれを聞けと言われること、そこがまた面白いところだな。聴聞である、聞くのである。誰から聞くのか、どこから聞こえてくる声なのか、とにかく聞いていかなければならない、われわれが生きているということは、朝から晩まで何かを聞いているということなのである。

。

一人でいると孤独で寂しいと普通いうけれども、そういう寂しさというのは、友達とか親とか学校とか社会とかいうものとの相対的な関係にあるところの寂しさであって、本当の孤独ではない。つまり外に出れば何らかの手ごたえがある。窓を開けておーいと呼べば、誰か下にいる友達が返事をするかもしれない。そういう孤独はまだ本当の寂しさではない。どこからか外の音が聞こえてくる。自分に縁がないにしても、外は車がダッーと走っている。そういうのは相対的な寂しさである。

ところが、入院して死をまえにほんとうに苦しんでいる。何を考えてみても応えがどこからも来るということがない。つまり相棒がない、本当の空虚なのだね。それでは本当に生きる力は出てこないでしょうね。

たとえどんなに寂しいところに一人でいても、どこからか何かが聞こえてくるのだ、聞くことができるのだということがあれば、これは生きる力がそこに出てくると思う。

どこからかは分からぬがそういう聞くというひとつの道、それがただ念仏である。

もし宗教というものがあれば、宗教というのはそういうものではないだろうかな。ただ一つでいいのである。余計なたくさんのものは何も要らない。ただ一筋にどこからかいのちの声が聞こえてくる、それがただ念仏である。

こんな騒々しいやかましい何でもかんでもあり過ぎるような物の過剰な世界におりながら、病気になって、病院の中にたまたま入ったというだけで、忽然として孤独になってしまう、妙なものですね。広大な宇宙、あるいは人生の中に、どこへ何に自分の心を繋いでいけばいいか、繋ぐところがない。元気な間はまだ医者に頼るとかと思っているけれども、お医者さんさえこれはもう時間の問題ですよなどと言ってくれれば、その声それさえもわからなくなり、自分をどこに何に繋いだらいいかわからない。

そのときに、さっきのプリントで言うと綱でしょうね、綱におびかれてというやつ。一筋の綱がそこにあるということを知らされる、知らされるだけではない、事実その声がこっちに響いてくる、あるいは聞こえてくる。それがただ念仏である。そういう道を教えてくださったということは、これは有難いことだと思いますね。

世間では念仏はまったく意味のない余計な言葉である。

ところがこれは世間のものではないのであって、世間と絶縁したときに、自分自身の存在そのものを支えてくれるといえばまだまだ力のない言葉だな、そこに本当に自分があるということを知らされる、それがただ念仏ではないでしょうか、それを聞くということである、いのちのいわれを聞く。

本願のいわれを聞かないでただ念仏するそういう念仏は駄目だと蓮如上人がおっしゃったが、「親鸞にをきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて・・・」という、このただ念仏は、機のはからいを捨てての念仏なのである。

二、信心一つが、それが外に現れればただ念仏となる

曽我先生が自分の考えを述べておられるのは、いま考えてみるとあの終戦の破滅に一刻一刻迫っていった、昭和十五年以降のあの時代です。

先生は「今日のような時代には、人間の思想が非常に複雑でありしかもその複雑にたえられないのである。このような時代には最も、単刀直入な言葉が必要でないか」とおっしゃっている。つまり単純一筋の道。

しかし僕が「一筋の道」という言葉を、昔に使ったのはこの本から来たのではないんですよ。道元禅師の思想に何かそういうことがあったので、一関に来た当時、あの一筋の道を使ったのでした。たまたまここでも、曽我先生も一筋の道という言葉を使っておられます。

現代では、何かというと形而上学的な難しい理論や主張が発表されています。文芸評論とか、学会の消息とかが、週に一回か二回『読売新聞』に出ていますが、難しいですね。高等学校の生徒であれ解るだろうかね、文体そのものも昔と違ってきているようだし。文芸評論などもずっと前ならば僕も楽々と小説を読むと同じような気持で読めたけれども。といっても小説はこのごろは読まないからわからんが、小説も難しくなっているのだと思うが、評論もなかなか難しい。それでも文芸評論はまだわかる、非常に栄養になるようにわかるのだが。欧州の思想の紹介やなにかは、それをまた日本の現状に照らしていろいろ論じておられるのを読むと、新聞に載る程度のものだからそんなに特に専門的なものではないはずだと思うのだけれども、難しいな。ああいうのを読んでい

ると一時間くらいかかってしまう。

曽我先生が終戦前に、「この頃書いたものはどれを読んでもみな学者がすぐ形而上学的に難しい理論によって、」といった内容のことを書いてましたが、今の今になおそれが続いている。

そういう時代であるだけに、なにかこの単純率直はモットーというものは、あっていいのではないだろうか。

明治以後現代まで、一つの本の注釈とか、解釈とか、紹介等で『歎異抄』ほど沢山の本が出たものはないと言われているらしいな。その理由はどこにあるかというと、『歎異抄』の中心概念、「ただ念仏」というこの表現にあるのではなかろうか、多分そうかも知れませんね。もうちょっと理屈っぽい、なにかくどい内容だとこれほどに時代の人々を動かさなかったのでは、要はただ念仏、これがちょうど時代の急所を突いたのでないでしょうか。

鎌倉時代に聖道の仏教はある意味では非常に盛んだったけれども、仏教を代表するそういう題目はなかったと言っておられる。親鸞聖人の後には日蓮上人が「南無妙法蓮華経」というものを出されるけれども、一般的にいって禅宗なんかには題目はなかった。つまり仏教の旗印というものがなかった。そこに目をつけて民衆を救う道は何だ、難しい聖道のああいう修行をせよとか、こういう行をせよとか、それは非常に結構なことには違いないけれども、面倒臭い、お経は難しい、いろいろな修行の項目が煩わしい。そういう時代に、そんなものは必要はないのだ、ただ念仏これが人の心を救済する道だ、そこに着眼されたのではないだろうか。

法然上人はそれを選択本願、本願の念仏とした。仏教の中から念仏だけをとりだした。仏教の中から弥陀の本願をとりだして、その本願の中からさらに、四十八の本願の中からさらに第十八願をとりだして、念仏をとりだした。選択本願の南無阿弥陀仏という念仏をとりだした。これによって救われるのだというただ一本の旗を立てたわけである。

親鸞聖人は、そのエッセンスをとって、念仏の中心は信心為本であり、信心を基とするとした。難しい行だとか、学問だとか、修行とかそんなものはぜんぜん必要ないのだと、信心一つでいいのだと。その形にあらわれたのが念仏である。念仏の中身は信心一つそれでいいのだと。

これも単刀直入でこれほどはっきりしたものはないでしょうね。どんな学問のない人も、どんな善人でも、ど

んな悪人でも、大きな屋敷にいる人でも、あるいはあばら屋にいる人でも、乞食をしていても、牢獄のなかに寝ていても、信心一つでいいのだ、することはただ念仏だと。こう言われれば、よっぽどスカッとしたでしょうね。これだ！と、これで俺たちも生きたかいがあるのだと、こう思ったろうと思うのです。

それは、鎌倉時代の南都北嶺やなにか立派な華々しい宗教は上の方の人々にはいいかも知れないけれども、一般の庶民は寄りつきようがない。そういうときに選択本願の念仏が、いやそれはもっと自分の内側をつきつめると信心だけでいい、信心為本だと親鸞聖人がおっしゃった。信心為本が外に現れればただ念仏である。唯称念仏である。これ一本でいい、これ一筋の道でいい。言い換えれば一心一向の念仏である。一切のはからいを捨てる。善いとか悪いとか、救われるとか救われないとか、損だとか得だとか、全部捨てて、機のはからいを捨てての一心一向の念仏である。

信心一つ、一行一心、これがあの時代に浄土真宗が広まった所以ではなかろうか。ということは、現代のわれわれとして、そこに何か大きな、考えなければならないことがあるのではなかろうか。

曽我先生がこの「表現の単純性」ということに非常に力こぶを入れておられる。

最近結婚式に出たのですけれども、結婚式などで「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言ったらどうだろう（笑い）。葬式仏教にしてしまったのは、本願寺仏教の弊害だね。しかし結婚式などで「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言ってもちっともおかしくないというのが本当なのだろうな。

病院に行っていてもそう思いますね。平生、みなさんと一緒いると感じないが、ああいうところで、いずれ最後は同じようなところをお互い通って行かなければならない。そこにただ念仏とただ一筋でもそういうルートができているということは、なんというかな、救われるということはまどろこしくて言えないけれども、力強いものではないだろうか。

病人の側にいて、みなさんご経験のことだろうが、どうともできないものね。横にじっと座って見ているしかしようがない。せいぜい手をさすったり、足をさすったりすることくらいのことで、それも下手をすればかえって熱をおこすからよほど病人の実態をつかんでいなければできない。しかしまたこの頃の病院のように、まった

く隔離して人をだれも入れないようにするのも、あれもまた問題だ。

漢方では、看病することを看取るなどと言いますね。達者な人の目で病人の目をじっと見てやる、それが非常に力がつくのだそうです、そうかも知れないな。病人は一刻一刻エネルギーが向こうへ向こうへと逃げていく存在だからね。それよりも注射かなんかすればいいというけれども、確かに注射はよいだろうが、いずれは注射も効かなくなるだろうからな。枕元に座ってじっと目を見てやる、これは非常に力になるのだと、差し支えない限り、熱が出ない限り、手を握ってやる。今から頼んでおくわけではないけれども、まあそう思うね。

僕がこの前寝たときは、敷居の向こうに人が来ても、すぐ身に応える、苦しい、圧力を感ずる。なかに入って挨拶されるのは有難いけれども、するとすぐに熱が出るのだね。だから済まないけれども敷居の外側にいてもらいたいと言ってもらった。ものを言われるとすぐこっちに響く、身に応える。その時でも便所へはなさけないようだけど、這うようにして行った。だからまだ力はあるときだったが。あのときでさえもう寝たままでいなければ駄目だというところまではいっていない。見舞いに来た人は、励ましてやろうと思って、快活に「しっかりしなさい」、「元気を出しなさい」などと言ってくれるのだけれども、それが・・・なわけだ。そういう面があると同時に一方ではまた、もうどうしようもないからせめて手を握ってもらいたい、さすってもらいたいと思った。とくに足をね。もうそうなるとさすってくれとも言えないだろうからね。

そういうときにただ一つの最後の、万策尽きた後に出てくる道。万策がある間はまだなにか自力が残っているのだろうな。しかし万策尽きてしまった後の世界に、ただもう真っ暗でわからぬというのではなしに、一筋の道があるぞと教えられるということは、これは大きな力になると思う。その時になってみないとわからないがそんな気がするね。そうしてみるととにかく念仏という言葉だけでも一般に知っているということは必要ではないかと思うのだがね。

われわれの惰性というものは恐ろしいもので、既成宗教の世界、また隠し念仏の世界でも、子供のときから念仏ということがあんまりわかりすぎてしまって、かえってほんとうの念仏の感じが案外ない。　だから新しい時代の新しい世界に対しては、何かこのへんで念仏も新し

く相応しないだろうか。今の新聞の一般論文などが、若い人たちに普通に楽々と読んでいけるというならば、それに相応して念仏も、そういう世界に一緒に入っていけるようになるべきもの、あるいはそうするべきものかも知れないね。

とにかく他の本では考えられなかったほど、『歎異抄』に関する本が明治以来でたというのは、おそらくただ念仏というこの単純さにあるのではなかろうか。

三、法蔵菩薩は人間の自覚の意識の根源であり、念仏の道のなかに本願を起こされた

それでは曽我先生の第九講「二、念仏の伝統」に入らせていただきます。

先ほど申しました、「機の善悪のはからいを捨てる」、そのはからいを捨てた世界は本願念仏である。その本願念仏を信ずる、これをその裏からいうと宿業にまかせることである。ここで宿業が出てきた。しばらく宿業という言葉は出ませんでしたが、宿業にまかせてというのがこの裏にある。

これが二種深信、二種というのは機と法でしたね。これが浄土真宗のスタイルでしょうね。

この二種深信の本元、この道の本元を開いてくださったのが法蔵菩薩である。つまり機の善悪のはからいを捨てて本願の念仏を信ずる。

われわれは時間の中に生きていかなければならない存在である。時間的なその存在の内容は何かというとそれは宿業である。百人が百人ともみな違う、十人が十人ともみな違う。ここでしゃべっている者もあれば、病院で生き死にと戦っている人もある。それも宿業である。

おのおのそれぞれの機と、法とを一つにした深信、そういう道を法蔵菩薩が開いてくれた。

そういう道とは、われわれのいのちの、あるいは現在のわれわれの人間の自覚の意識の根源への道なのでしょうね。そうしてみると法蔵菩薩というのは実は他人ではないのだろうね。法蔵菩薩とは、われわれ自身が自分自身の宿業の奥をずっとたどっていった一番奥にいる本来の自分ではないだろうか。

仏教は、外に仏さまがあるのではない。つまり私自身のいのちの歴史の根源に私自身が立ち返ってみたときに、僕でない僕、自分でない自分が法蔵菩薩としてそこで思慮を集めてくれている。そういうのではないでしょうか

ね。

だから念仏というのは、与えられる念仏であるけれども、それを与えたものは誰かというと、あんがい本来の僕自身である。ほんらいの僕自身だが、そこまでいけば僕とか他人という区別はない、一切の衆生そのものの僕ではないのかな。一切衆生が一緒になってそこに集まって自分自身の姿を掘り出そうとし、その結果その奥から出てきたものが法蔵菩薩である。何かそんなような感じがしますね。その奥から湧いてくるのが念仏の声なのである。

法蔵菩薩は、念仏の道によって成仏された。これは現在のわれわれの道、衆生道であるが、法蔵菩薩も実はこの道によって成仏された。法蔵菩薩がみずからこの道を行じ、一切衆生救済を成就した、それが念仏の本願である。

私が前から疑問に思っていたのはこういうことなのです。法蔵菩薩が五劫の思惟をし、また長い間にわたってわれわれのために修行してくれた、その修行のおかげでわれわれは救われたと、こういうように聞いてきた。法蔵菩薩が一生懸命に修行された、ご苦労なさったというからその修行は聖道門の修行のように思っていた。

法蔵菩薩自身が聖道門の修行をして仏に成られた。ところが、その聖道の修行はお前らにはできない、駄目なのだ、だから念仏だけの易行でよい、それで救われるのだと思っていた。

法蔵菩薩はわれわれのために聖道の修行をされたということは、ありがたい話のようだけれども考えてみると少しおかしいな。自分は聖道門で仏になっておいて、われわれに対してはお前らは聖道門では救われない、念仏で救われるのだというのはなんだかおかしい、どこか腑に落ちなかった。

ご自身は聖道門で救われて仏になった、だがわれわれ衆生は聖道門ではだめだと。これでは何か差別があるようだ。法蔵菩薩が聖道門で成仏したのなら、われわれも聖道門でやってやろうとなる。ところが実際やってみると、なかなかそれはできない、できないことは事実である。事実であるから、では浄土門で救われましょうということには違いないけれども、なんだかおかしい。なんだかおかしいと思ったら、曽我先生はそうではないという。

曽我先生もはじめはそう思ったとおっしゃっている、

だけどもよく考えるとそうではないのだと。つまり法蔵菩薩の修行は自力聖道門の修行ではない。じゃ何の修行かというと念仏の道だという。これはもうほんらい法爾自然の道である。この念仏の伝統の道の中に修行されたのである、そうして成仏された、こうおっしゃっている。

これで僕らも安心できる。そうならわかる。ご本人も南無阿弥陀仏という念仏で、念仏を称えて念仏の道で修行されて、そして仏になられた。だからお前たちも念仏の道に来いと、これならばすっきりしている。

阿弥陀如来は念仏のご先祖である。だがそのご先祖自身もみずからも南無阿弥陀仏の念仏の中にずっとおられた。さらに先祖があり、さらにご先祖がある。そのご先祖の伝統の歴史の中に四十八願を発して、そのなかで念仏浄土を荘厳された。これならわかりますね。だから、南無阿弥陀仏は四十八願以前にある。その念仏の伝統に基づいて本願を立てられた。四十八願を通して如来は十方世界を照らす光を成就する。

つまり念仏はあったのだけれども、念仏だけではわれわれにはとどかなかったのでしょうね。そこで、念仏の道の中に行をすることによって、如来は四十八願を立てた。四十八願を通して念仏がわれわれ衆生にあらわれてくれた。われわれが如来を仰ぐのは本願を通してである。本願がなければ如来さまがあるかないかわからない。本願を通すことによって、如来を如来としてわれわれは仰ぐことができる。だがその本願の基である念仏そのものは、初めからあったのである。だから本願が先にあるわけではない本願に先立って念仏がある。こういうことのようですね。

僕らは子供のときに、法蔵菩薩はわれわれに代わって難行苦行をしてくださったというように聞いておる。難行苦行だからつい聖道門的な難行苦行をされたのかと思ってしまうと何かおかしいのだな。われわれにそんなものは要らないとおっしゃるのがおかしい。そうではない法蔵菩薩自身も念仏の行を積まれた。

その念仏だけに止まっては、衆生のところ慈悲が通じない。法蔵菩薩が念仏の行を通して如来になられた。如来が十方世界を照らすとは、われわれ衆生にあらわれたことですから、念仏のなかから本願が生まれてきた、四十八願が生まれてきた。だから本願のもとには念仏があり念仏が先にある、念仏の道がこれが伝統である。その伝統のなかに法蔵菩薩が生きてこられた。その伝統だけでは衆生の方へ慈悲は届かない、そこで本願を立てられ

た。だから念仏が先にあってそれが本願になってきたと、その本願によってわれわれは救われる。

選択本願、一切諸善万行のなかにおいて、とくに念仏の一行をえらばれた。

ここの言葉の表現ですが、別のところにこういうように曽我先生は言っておられる。親鸞におきてはただ念仏してというあのただ念仏してのただは、雑行雑修を捨てると事だと。その次に、

定散自力のもろもろの万行にえらんでただ念仏。

と仰せられる。ただ念仏のただというのは、雑行雑修を捨てるという意味である。定散自力のもろもろの万行にえらんでただ念仏。この「に」は、どういう意味があるのかわからなかった。

願教寺の和尚さんにも聞いてみた。和尚さんは、こういう使い方は知らないというお返事だったんだが、実は僕はこの言葉を、文章ではなく昔に和尚さんの話のなかで聞いた覚えが確かにあるのだ、そのときは、はあ、専門の坊さんはこういう使い方をするのだなと、感心して聞いた。思い違いではなしに、確かに聞いた覚えはあるのだがそれは何年も前のことでした。

今度は聞いてみたら、すぐ「それはこうこうこういうわけです、われわれの方ではこういう言葉はしょっちゅう使っているので」とでも言われるかと思っていたら、「いや、そんな言葉は私はわからん。どこかに聞いてみましょう」といって、井上善右衛門さんにきいて下さった。すると井上さんは、そのことは気がつかなかったとおっしゃった。

それからいろいろ考えてみたけれども、はっきりわからないが前後の関係からみて、僕には次のような意味に思えた。十人の子どもがいてその中から一人の選手を選ぶというとき、十人の子どもは同じ平面にいる、それが普通の場合なのでしょう。ところがそこで「に」というのは多分、何か差別を強調するために、僕の気持でいうならば、たとえば他の人とこの一人とは質が違うのだと。たとえば九人はここにいるが、一人はもう一つ下の層な

ら下の層にいる。その質の違いを明らかにする。雑行雑修と本来のあり方の念仏とは、段が違うのだ、本来、質が違うのだと。

歴史的には聖道門の念仏は、他の定散自力の修行と同じ列にあったのですね、念仏も一つの修行の方法だったのだから。ところが法然上人の、あるいは善導大師の見方からすると、念仏というのは坐禅をするとか、他の一般の定散自力のもろもろの万行とは本質が違う、それは一段下の深いところのものであり、他の定散自力と修行と同じように肩を並べている念仏ではないのだと。そういうものを色々あるある中から念仏だけを特に引っ張り出してと、そういう気持なのではなかろうかと、僕はそのような意味のことを井上さんに言いたかったのだが。だいたい井上さんも、多分そういう意味で強調されて使っておられるのだろうと、こういうお返事だった。

これは僭越な話なのだけれども、今になって考えてみると僕も余計な理屈を詮索したもので、そんな理屈っぽいことなど言う必要がなかった。この「に」は曽我先生が諸善万行の中においてと仰っているが、その中にを略しただけのことなのであると。

余計な詮索をしたものだと思っている、僕も。どうも気にかかったものですからね。というのは初め和尚さんから、話を聞いているときにふっと確かに一度この言葉を出されて、僕も変に感心したものだから。きっと坊さんたちがお互いに話をするとき平生そう言う習慣があるからそう言われたので、きっと何か特別のニュアンスがあるのだろうとそう思って、そのニュアンスを聞きたかったのです。

そうしたら、あまりにも真面目に受け取られてしまって、そういうことになってしまった。今になってみると、そんな七面倒くさいことを理屈っぽいことを言うのは愚かなことでした。曽我先生が話の中で、「諸善万行においては」とか、「諸善万行の中について」とか言うところを「諸善万行にえらんで」と、こう言われたのだと思う、それが印刷になっているのだろうと。

しかし、何かわけがありそうな気もするな、悪く気をまわすと。けど、この使い方は別として、善導大師は聖道門の念仏とは価値的に段を違えられたことは、これは事実だね。そういうことを意識して曽我先生がこういう「に」の使い方をしたかどうか、これはわからないのだ。ここは「諸善万行の中に」と書いてある。これだけを、面倒だから、話の勢いだから、「諸善万行に」と言っても

不思議ではないね、日本語として話せば。

つまり法蔵菩薩までは漠然として念仏があったのを、法蔵菩薩はただ念仏の一行を、諸善万行の中の一つとしての念仏ではなしに、そういうものの中から「ただ念仏」の一行を輝かされた。

これをくだいて言うならば、『歎異抄』第十一章にあるように、われわれ衆生が「やすくたもち、となへやすき名号を案じいだし」たもうたと。これが法蔵菩薩である。四十八願を出して特に念仏をした者を救おうと名乗りを上げたのが法蔵菩薩なのだ。それまではただ漠然として念仏であったのを、「これだ」と名号を掴みだしてこれならどんな者でも、老少善悪を問わず、病人であろうが、悪人であろうが何であろうが、易く保ち称えやすいと。これによってこの世からあの世へ引っ張り上げてやろうと、これはただ一筋の道なのだ。

四、この世に有ることと浄土に在ることを、
結びつけるのが念仏である。

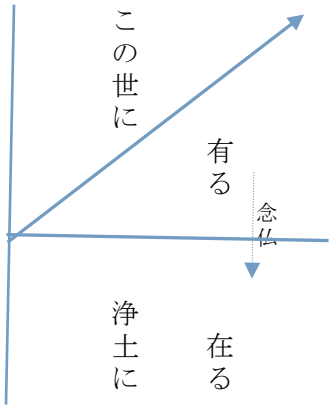
こう聞くと、法蔵菩薩にわれわれは親近感をもてからますね。一般的な言葉で言えば、われわれ自身が本来そうだったのでしょうね。われわれがわれわれ自身に帰るだけのことなのである。死んだからといって、あっちへ行きこっちへ行きするわけではない。僕なら僕自身の中へ帰っていくだけのことなのである。その帰っていくとき、宙に浮いてぶらぶらして帰っていくのか。その帰っていく僕という一人の人間が有ることは間違いない、在るからの話なのである。有るということは、どこかに在ることなのである。有ることは在るのである。この「有る」の根源は仏なのでしょうね。この「在」の根源は何かというとこれは浄土である。

金子先生は浄土を、生の依るところ死の帰するところと言っておられる。仏はよくわかる。仏はだれでも一応わかる、仏様だと。浄土の方はすぐには、これと同じようにはピンとはこない。

考えてみると、有るということは在るということでなければならない。ただ有るというだけならば幽霊と同じでしょうね。幽霊はフワフワとしているがないとは言えない。けど幽霊には足がないから在るがない、。だから幽霊には浄土がない。浄土がないからどこに行ったらいいかわからない。こうしてこの辺りにかえってくるわけなのである。

幽霊は確かにそうだな、幽霊はすくなくとも有る、だけど幽霊は在るがない、足がないのだから。足がないということは、大地に足をつけたいのだが、大地がないのだからしようがないからこの辺りにうろうろしている。浄土にちゃんと帰れば幽霊は出て来はせん。だから迷っているというのはそこなのである。

有と在との間を結びつけてくれるのが、これを一つに結びつけてくれるものが念仏なのである。この念仏によって有と在とが結びつく。



われわれは平生は浄土の在を考えない。ただ有るのだ、この世に有るのだと、われわれは生きているのだと、それでいいつもりになっているのだけれども、その限りにおいては念仏は必要ない、全く余計な話なのだ。

だけれども、有に対して在を考えたときには、在に思い至ると、さてこの世から浄土へどうしていったらいいかわからない。仏があるということは一応わかっても、仏がどこにおられるかわからない。仏の国がわからないようでは行きようがない。仏になってもいわゆる幽霊になってしまう。では有るから在へどうして行けるかというと、それが念仏である。ただ念仏、ただ一筋の道が、一本道がある。

どうも、そういうことのようです、この「ただ」というのは。曽我先生はずいぶん丁寧に「ただ」ということを言ってくださっておられるようですね。

では今日はここまでに。

以　上